
地獄先生

櫻井事変

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地獄先生

【Nコード】

N6479Y

【作者名】

櫻井事変

【あらすじ】

カー・ステレオの音量を下げ、先生は胸ポケットからマールボロを取り出して、ライターで火をつけた。先生の誕生日にサツキがプレゼントした銀色のライター。三時間もかけてサツキが選んだ高級ライター。煙草が好きな先生のためにサツキが買ったライターだった。天井へ輪になって浮かんでいく煙を目で追いながら、先生はようやく口を開いた。「終わりだ」（本文より）

カー・ステレオからは朝のラジオ番組が流れていて、三月最後の日曜日の天気を知らせている。昼すぎから雨が降るらしい。「傘を持ってお出かけください」という頭の悪そうな女の声が車の中にむなしく響く。サツキはウィンドウの外を見た。市営プールのさびれた駐車場。鈍くて重いグレーの空。月も朝日もどこかに姿を隠している。雨の予感をはらんだ静かな朝だ。天気予報は無害なメロディとともに終わりを告げてCMに入る。次の番組はまだ始まらない。コンビニで買ったパンとミルクの朝食を食べながら、サツキは運転席で眠っている先生の顔を見た。髪はたった今ジャングルを走り抜けてきたようなぼさぼさ加減だし、髭は無人島で救助を待っていた男のように伸び放題になっているし、爪はまるで魔女みたいに長かった。乳首の周りからは可愛らしく毛が生えていて、特に長い一本が生氣を失ったようにうなだれている。サツキはこの乳首の毛がたまらなく好きで、セックスをするときにいつも引張っては先生に怒られていたのだった。派手な色のトランクスだけを身につけて眠っている先生の足元には、精子が底にたまったコンドームが落ちていて、異様な臭いを放っている。

「先生」

先生のざらついた頬を叩く。唸り声を上げるだけで先生は起きる気配を一ミリとして見せない。深い海の底に沈んでしまっているみたいだった。彼の眠りはおそろしく深く、とてつもなく長いのだ。ラブホテルに泊まったときは十一時間、デイズニー・リゾートに出かけたときには十三時間、アパートに泊まったときなんてほとんど二十四時間は寢息を立てていたくらいだった。性欲といい、食欲といい、睡眠欲といい、先生は限りなく本能に弱い男なのだ。

何ミリかのミルクがまだ底に残っている瓶をジュースホルダーに置き、パンの最後の一切れを食べ終わると、サツキはため息をついて先生の耳元に口を寄せた。

「起きろ！」

「イエス！」

稲妻に打たれたように体を跳ね上がらせて、先生は深い眠りからようやく目覚める。先生は迷子犬のようにきよろきよろと辺りを見回す。カー・ステレオを眺め、市営プールの駐車場に目をやり、トランクスの中に右手を突っ込み、ペニスの位置を調整しながら、ようやくサツキを発見したようだった。髭だらけの顔がゆっくりと笑みを浮かべる。

「おはよう、マイ・ハニー」

「はいはい、おはよう」

「叫ぶなよ」

「叫ばれるよりチンコ殴られる方がよかった？」

「いやーん、こわーい、サツキちゃん」

「バカ」

先生はサツキの頭を叩きながら、カー・ステレオのボリュームを上げた。掃除機とコーヒーとスニーカーと政治家の講演とインデイズ・ロックバンドのCMが通りすぎて、午前七時からのラジオ

番組が始まり、DJが軽快な調子でトークを始める。

「ハロー。グッド・モーニング。おはよう。日曜日の朝七時といえば『モーニング・ロックンロール』。『モーニング・ロックンロール』といえば日曜の朝七時。今週も東京FMから全国へとロックンロールと楽しいトークをお届けするよ。」

今日はお昼から雨が降るらしいね。どうりで寒いわけだ。お出かけの際にはレインコートと傘を忘れずに。

そうだそうだ、傘といえばこの前ね、僕がうどん屋に行ったときの話なんだけど、三月の初めだったかな、いや、二月の終わりだったかな、まあいいや、とにかく、椅子の横に傘を置いてね、きつねうどんを食べてたんだ。きつねうどんっておいしいよね。おっぱいの大きい女の子とドアーズときつねうどん。これ、僕の好きなものベストスリー。正直に言えば、いちばん好きなものはお金なんだけどね、お金は裏切らないから。なんちゃって。で、きつねうどんを食べ終わって、さあ帰ろう、と思ったら僕はびっくりして腰を抜かしちゃったよ。あれは驚いた。傘がなかったんだ。十秒前までは確かにそこにあっただのに。本当の話だよ。どこに行ったんだろう。マイ・アンブレラ。まさに狐に化かされたってやつだ。まいったね。ほんとに。神隠しってああいうのを言うんだらうね。

それじゃあ、そろそろお喋りを中断して、今日の一曲目に行こう。三月の肌寒い朝にはベッドで女の子を抱くか、音楽を聞くに限るよ。じゃあ聞いてくれ。オアシスで『サンデイ・モーニング・ベル』。どうぞ」

カー・ステレオからオアシスの『サンデイ・モーニング・ベル』が流れ始める。

優しいギターの音。リアム・ギャラガーの素敵な声。朝にふさわしい、朝のための、朝の音楽だ。

「超寒いんだけどこのD」

「こういう男が日本を駄目にするんだぜ」

「先生には言われたくないと思う」

「先生の言うことは目と耳と心で素直に聞いとけよ」

「ちょっと何言ってるかわかんない」

「ちょっと病院行つてこい」

助手席に身を乗り出して、先生はいきなりサツキの唇にキスをした。新しい朝の新しいキス。雀がどこかで可愛い鳴き声を上げる。線路の上を電車が走る音が遠くから聞こえる。トヨタ・カロラが滑るようにゆっくりと先生の車の前を通り過ぎていく。十五秒きっかりで先生はサツキの唇から離れた。乱暴で、野性的で、素敵なキスだった。目に浮かんでいた夢の残像みたいなものを大きな欠伸をして吹き飛ばし、後部座席からコンビニの袋をとって、先生はチーズ・バーガーとコカ・コーラの朝食を食べ始める。

「朝からヘヴィーなもん食べるね」

「ヘヴィーな男にはヘヴィーな食事が必要だからな」

「なるほど」

「そういうこと」

映画スターみたいなウインクをして、先生はチーズ・バーガーに

かぶりついた。見ていて気持ちのいいくらい本当に見事な食欲だった。上品ではないし、むしろ下品といった方が適切なくらいだったが、見ている者の食欲をどこかしら刺激するところがある食べ方だ。食欲を刺激するという点においては、くだらないグルメ番組なんかよりもよほど効果的だった。肉食動物のように次々と食事を進める先生を見ると、サツキはいつも世界の平和を祈りたいような幸福な気持ちになるのだ。

口の周りにたつぷりとケチャップ・ソースをつけてチーズ・バーガーをたいらげ、コカ・コーラを一気に飲んでしまうと、先生は耳をふさぎたくなるような音量でトロンボーン・ソロみたいな長いゲップをした。

「車の中でゲップすんな、クソオヤジ」

「生理現象なんだから避けようがねえだろ、クソガキ」

DJの声がカー・ステレオから聞こえた。オアシスの『サンデイ・モーニング・ベル』はいつの間にか終わっていたらしい。DJはまたつまらない話を始めていた。近所のスポーツジムに通い始めた話と、ペットのミニチュア・ダックスフンドの自慢と、総理大臣の問題発言についての言及だった。話題の最後には100パーセントの確率で「まいったね」というコメントがついた。

車の中には気持ちのいい親密な時間が流れていた。先生はポケットからパーミント・ガムを一枚取り出してすすめてきた。サツキがゆっくりとガムを噛み始め、カー・ステレオの中でアヴリル・ラヴィーンが『ドント・テル・ミー』を歌い始め、電気シェーバーをどこからか取り出して先生が髭を剃り始める。生活感のある素晴らしい朝のワンシーンだった。通奏低音のような電気シェーバーの音がせまい車の中にしばらく響いた。

「サツキ」

顎の下に電気シェーバーを当てながら先生が名前を呼んだ。サツキはそれに鼻を鳴らして返事をする。先生はしばらくルームミラーを睨んで髭を剃り続けた。運転席の横のヒーターはついているのに、車内の気温がぐっと低くなったような気がした。予感はしていたのに胸の奥が狭くなるような感覚に襲われる。どうしようもない。サツキは助手席側のウィンドウの外に目をやり、軽く唇を噛んだ。

電気シェーバーの音が消える。一瞬の隙間ができる。アヴリル・ラヴィーンが泣きだしそうな声で歌う。

カー・ステレオの音量を下げ、先生は胸ポケットからマールボロを取り出して、ライターで火をつけた。先生の誕生日にサツキがプレゼントした銀色のライター。三時間もかけてサツキが選んだ高級ライター。煙草が好きな先生のためにサツキが買ったライターだった。

天井へ輪になって浮かんでいく煙を目で追いながら、先生はようやく口を開いた。

「終わりだ」

先生はマールボロをくわえて目を細めた。ウィンドウの外からは薄い光が射しこんで、綺麗に髭を剃った先生の顔を照らしていた。急速に親密感が失われ、一秒ごとに関係性が薄まっていくような気がした。目の前でマールボロを吸っている男の姿は、ニュースで見る戦争の映像みたいにならずと遠くにあるもののように思えた。

四畳半の部屋でテレビを眺めているときの沈黙に、カフェで注文したコーヒーに映る先生の表情に、卒業式の日の教室に、別離の予感が静かに息を潜めていたことをサツキは知っていた。キスの長さにもセックスの気持ちよさにも変化はないのに、日常の些細な風景の中に少しずつそうつた瞬間が増えていっているということにサ

ツキは気づいていたのだ。目をそらし、耳をふさいでいるうちに別れは本当にすぐそこまで迫ってきてしまっていたのだ。

静かな朝が止まってしまいそうなほど悲しいため息をついて、サツキはつぶやいた。

「終わりだね」

「終わりだな」

市営プールの駐車場の景色を眺めながら、サツキは言葉にできない感情に胸をしめつけられていた。街灯が光もなくなたたずみ、車の数はまばらで、犬が一匹歩き回っているだけだった。首輪がついていた。脱走してきたのか、捨てられたのかはわからない。親切な誰かが野良犬に首輪をつけてやっただけのことかもしれない。毛はぼさぼさだし、体は薄汚れているし、おまけに不機嫌そうな表情を浮かべていた。先生にどこか似ているところがあつた。犬は一度だけ先生の車の方を見て、どこかへ歩いて行ってしまう。犬がどこから来たのか、どこへ行くのか、それはわからない。犬だけが知っていることだ。

透明な瓶の底に残ったミルクに目をやる。サツキは思わず泣きだしそうになっていた。泣きたくはなかった。本当に素晴らしかったこの恋愛を涙で終わらせたくはないと思ったのだ。

先生のすべてが好きだった。乳首の毛もキスも笑い声も意味不明の寝言もマールボロを吸っているときの表情も乱暴な喋り方も好きだった。町の片隅にあるアパートの汚い部屋も、持ち歩いているペーミンント・ガムも、スマッシング・パンプキンのポスターも、穴の空いた靴下も、五弦がさびてしまっているエレキギターも、先生に付属して先生の一部を作り上げているありとあらゆる要素がサツキは好きだった。純粋な恋であり、純粋な愛だった。純粋な愛であり、純粋な恋だった。

カー・ステレオの中ではあのDJが再びトークを始めている。時間も世界も人生も止まることを知らない。ただひたすらに日々は消費され、浪費され、一秒ごとに世界は更新されていく。日曜日が終われば月曜日だし、東で民族をめぐる戦争が終われば西で宗教をめぐる戦争が始まるし、恋をすれば喜びも悲しみも味わうように世界は出来ているのだとサツキはその瞬間にさとした。

友人はでき、また離れていく、とステイーヴン・キングは『スタンド・バイ・ミー』の中でそう書いた。

恋人だって同じことだ、とサツキは思う。

恋人はでき、また離れていく。

「帰るか」

先生は遠い時代からの叫びみたいに静かにつぶやくと、短くなつたマールボロを汚いシガレット・ケースの中に放りこんだ。

レイディオヘッドの『フエイク・プラスティック・ツリー』が、いまゆっくりと車の中を満たしていくところだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6479y/>

地獄先生

2011年11月20日01時17分発行